

三つの詩の三つの都市×2 = 「ユートピア」と「ディストピア」

バータルジャビーン・ムンフバヤル (Баатаржавын Мөнхбаяр)
(モンゴル国科学アカデミー言語文学研究所)

文学の一つの大きなジャンルとして都市文学がある。文学理論においては、それらを「都市文化 (Хотын соёл / Urban culture)」や「都市文学 (Хотын уран зохиол / Urban literature)」というように、個別的に取り扱っているが、都市文化や都市文学の存在の本質を明らかにする「ユートピア文学 (Utopian literature)」(完璧な社会と都市の建設を賛美した文学)と「ディストピア文学 (Dystopian literature)」(健全で優美なものと共に存在しているものの秘匿され隠蔽された生活や世界を描いた文学)の視点から分析する方がより合理的である。それをウランバートルという都市を表象した以下の「ユートピア文学」と「ディストピア文学」の作品を例として取り上げ、検証してみたい。

1. 都市に関する詩歌の近代的な伝統

モンゴルでは真に文明化した都市文化の形成はかなり遅かったが、著名な作家たちは、ウランバートルについてではなく、まず外国の都市やその風景について詩歌を創作してきた伝統がある。例えば、D.ナツァグドルジ (Д.Нацагдорж) の「ベルリン道中記 [ウランバートルからベルリンまで] (Берлин явсан замын тэмдэглэл [Улаанбаатараас Берлин хүртэл])」(1926 [1927]年、ユートピア文学)、B.リンチェン (Б.Ринчен) の「夜のネフスキー通りで (Үдэш Невскийд)」(1947年、ディストピア文学)、モンゴルに留学経験のある内モンゴルの作家サイチンガ (Сайчунга) の「東京 (Токио)」(1941年 !?) と「ウランバートル (Улаанбаатар)」(1946年、ユートピア文学) などがある。これらの作品には、いずれも新しい都市のイメージ、都市の文化的状況、都市の景観などがある程度表象されている。

2. 新しい都市文化の影響

高度に発達した巨大な都市の文化は、他者やその周辺の衛星都市に甚大かつ急速な影響を及ぼすのが常である。そのような大きな都市の文化的な発展の影響を受けたのが、小さな都市のウランバートルである。例えば、ロシアの詩人ミハイル・マトゥソフスキー (Михаил Матусовский) 作詞、作曲家ヴァシリー・ソロヴィヨフ=セドイ (Василий Соловьев-Седой) 作曲の歌「モスクワ郊外の夕べ (Москва орчмын үдэш / Подмосковные вечера)」(1955年)の影響によって、「ウランバートルのワルツ (Улаанбаатарын вальс)」や「ウランバートルの夕べ (Улаанбаатарын үдэш)」などの歌が創作された。

3. ポジティブに評価された三つの「ウランバートル」 (ユートピア文学)

この項目では、B.ヤボーホラン (Б.Явуухулан) の「こんにちは、私のウランバートル (Сайн

байна уу? Улаанбаатар минь)」（1959年）、J.バドラー（Ж.Бадраа）の「ウランバートルの
大気（Улаанбаатарын агаар）」、P.サンドイジャブ（П.Сандуйжав）の「ウランバートルの夕べ
（Улаанбаатарын үдэш）」（1986年）を挙げることができる。これら三つの歌の歌詞には、
いずれも新しい都市に新しい文化が形成され、市民たちが心満ち足りた幸福な生活を送り、
清潔かつ最適な環境と社会で市民生活が営まれているウランバートルという都市が表象さ
れている。

4. ネガティブに評価された三つの「ウランバートル」（ディストピア文学）

1990年代からモンゴルは新しい社会制度に移行し、民主主義、人権、自由が尊重される
ようになったが、しかし深刻な社会的、経済的、道徳的な危機に陥ってきた。既存の都市文
化が衰退し、ゲル地域が拡大し、煤煙やゴミが増え、飲料水が減り、大気と土壌の汚染が広
がり、土地が資産家たちに専有されることによって、市民生活の権利が侵害され、犯罪、人
身売買、売春、アルコールおよび薬物の依存症などが増え、ウランバートルの市民生活が根
本的なエコロジーの問題としても危機的な状況に瀕している。したがって、このころから、
ウランバートルを否定的に見る詩や歌がおのずと現れるようになった。例えば、S.ツォクト
サイハン（С.Цогтсайхан）の「ウランバートルの街角で（Хотын гудамж）」、P.バトホヤグ
（П.Батхуяг）の「空飛ぶ円盤（Нисдэг тавар）」、T.ムンフエルデネ（Т.Мөнх-Эрдэнэ [Big
Gee]）の「地元（Дош / hood）」などの詩歌が創作されている。

5. 結論

ユートピア文学の時代において、モンゴルの社会的な価値は、社会主義時代にはウランバ
ートル市のイメージであった「アジアの白い女神」が、国家の発展を率先して指導する幸福
な環境にあると見なされていたので、柔和で友好的な、そして抒情性豊かな心理的傾向をよ
りいっそう文学で表現するよう要求されていた。

ディストピア文学の時代において、モンゴルの社会的な価値は、社会的な自由と思想の自
由になったが、都市環境においては社会的・心理的な圧迫とストレスが顕著となり、都市関
連のすべての問題において、エコロジー的な環境問題を解決することが強く要求されるよ
うになり、都市の空間は均衡を失い、居住に適しない環境になってしまったので、強硬かつ
批判的な表現が圧倒的となっている。

このような二種類の文学において、ユートピアであっても良い作品というわけではなく、
ディストピアであっても悪い作品というわけではない。それらは本来、いずれも読者の精神
的・心理的な共感（美的感受性）に関わるものだと考えられるからである。